

磐井の乱の史料について

磐井の乱の史料について

1 経緯記

A 天皇（武烈天皇）既に崩りまして、日統知らすべき王無し。故、品太天皇五世の孫、
袁本杵命、近淡海國より上り坐さしめて、手白髪命に合せまつりて、天下を授けまつ
りき。

B 品太王の五世の孫、袁本杵命、伊波礼の玉穗宮に坐して、天下治しき。（中略）

A' 此の御世に、竺紫君石井、天皇の命に従はずて、礼なきこと多し。故、物部荒甲の
大連・大伴の金村連二人を遣して、石井を殺さしめたまひき。

B' 天皇の御年、肆拾參歲。丁未の年の四月の御陵は、三嶋の藍の御陵なり。

2 経緯紀

〔二年夏六月壬辰朔甲午〕

(1) 近江毛野臣、衆六万を率て、任那に往きて、新羅に破られし南加羅・喙己吞を為復し
興建て、任那に合せむとす。

(2) 是に、筑紫國造磐井、陰に叛逆くことを謀りて、獨預して年を経。事の成り難きを恐
りて、恒に間隙を伺ふ。新羅、是を知りて、密に貨賂を磐井が所に行りて、毛野臣の軍
を防遏へよと勸む。是に、磐井、火・豊二つの國に掩ひ抱りて、修職らしめず。外は海
路を邀へて、高麗・百濟・新羅・任那らの國の年ごとの貢職の船を誘ひ致す。内は任那
に遣せる毛野臣の軍を遮りて、乱語し揚言して曰はく、「今こそ使者たれ。昔は吾が伴
として、肩摩り肘触りつつ、共器にして同食ひき。安にぞ率爾に使となりて、余をして
側が前に自伏はしむることを得むや」と。遂に戦ひて受けず。驕りて自ら矜ぶ。是を以
て、毛野臣、乃ち防遏へられて、中途にして流滞りき。

(3) 天皇、大伴大連金村・物部大連龜鹿火・許勢大臣男人らに詔して曰はく、「筑紫の磐
井反き掩ひて、西の戎の地を有つ。今誰か將たるべき」と云へれば、大伴大連ら食曰さ
く、「正直仁勇にして兵事に通へるは今龜鹿火が右に出づるもの無し」と。天皇曰はく、
「可」と。

〔同年秋八月辛卯朔〕

(4) 詔曰、磐大連、惟茲磐井非率。汝祖征、物部龜鹿火大連再拜言、嗟夫磐井西戎之姁
猶。負川阻而不庭。憑山峻而稱亂。敗德反道。御慢自賢。在昔道臣、爰及室屋、助帝而
罰。拯民塗炭、彼此一時。唯天所贊、臣恒所重。能不恭伐。詔曰、良將之軍也、施恩推
惠、恕己治人。攻如可決。戰如風發。重詔曰、大將民之司命。社稷存亡、於是乎在。勗哉、
恭行天罰。天皇親操斧鉞、授大連曰、長門以東朕制之、筑紫以西汝制之。專行賞罰、勿
煩頻奏。

〔三年冬十一月甲寅朔甲子〕

(5) 大將軍物部大連鹿火、親ら賊帥磐井と、筑紫の御井郡に交戦^{あひひき}。旗鼓相望、突圍相接、決機兩陣之間、不避万死之地。遂に磐井を斬りて、果して疆場を定む。

(蔡文類聚武部における典故の引用)

a 帝曰、咨爾、惟茲有苗弗率、汝徂征。(尚書)

b 陸夫與之小夷、負川阻而不廷。(魏書出征賦)

c 澤山阻水。(通鑑平貞觀)

d 倭使自貢、反道敗德。(尚書)

e 在昔周武、愛暨公旦、載主而征、救民塗炭、彼此一時、唯天所贊。(魏文帝於魯陽作詩)

f 良將之軍也、起已治人、推恩施恩、……戰如風發、攻如河決。(袁宏公三略)

g 大將軍之司命、社稷存亡、於是乎在。(後漢書)

h 惟恭行天之罰、……夫子焉哉。(尚書)

i 主親操銳、授將軍曰、(淮南子)

j 國以內、寡人制之、國以外、將軍制之、軍功爵賞、皆決於外。(尚書)

〔同年二月〕

(6) 筑紫君葛子、父に坐りて誅せられむことを恐りて、糟屋屯倉を獻りて、死罪を贖はむことを求む。

3 筑後國風土記(いわゆる乙類の風土記の逸文)

上妻の縣。縣の南二里に筑紫君磐井の墓墳有り。高さ七丈、周六〇丈なり。墓田は、南北各々六〇丈、東西各々四〇丈なり。石人・石盾各々六〇枚、交陣なりて行を成し、四面に周匝れり。東北の角に當りて一つの別區あり。号けて「衙頭」と曰ふ。其の中に一石人有り。縱容に地に立てり。号けて「解部」と曰ふ。前に一人有りて、操形にして地に伏せり。号けて「儼人」と曰ふ。其の傍に石猪四頭有り。「賊物」と号く。其の傍に石猪三頭・石殿三間・石蔵二間有り。

古老伝へて云へらく、雄大達天皇のみ世に當りて、筑紫君磐井、豪強暴虐にして、皇風に偃はず。生平けりし時、預め此の墓を造りき。俄かにして官軍動發りて襲はんとする間に、勢の勝つまじきを知りて、独り自ら最前國上臈の縣に遁れ、南の山の峻しき嶺の曲に終てぬ。是に官軍、追ひ尋ぎて蹤を失ひき。土怒り溢ますして、石人の手を撃ち折り、石馬の頭を打ち墮しき。古老伝へて云へらく、上妻の縣に多く瘡疾有るは、蓋し茲に由るか、と。

4 國造本紀

伊吉島造、磐余玉璫の朝、石井に従へる者新羅の海辺の人を伐つ。天津水瀨の後の上毛布直の邊なり。

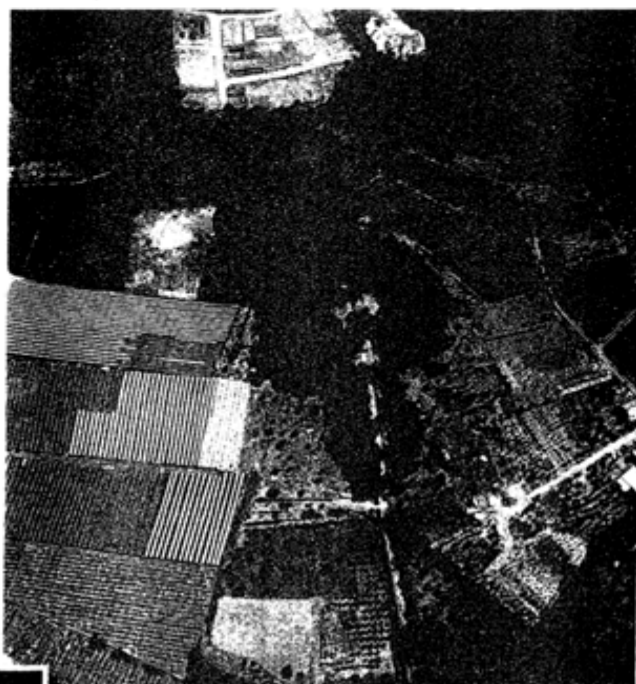
山尾幸久

文献から見た磐井の乱

古代最大の内戦 磐井の乱
一九八五年二月一〇日初版発行

発行所 大和書房

全長約110mの前方後円墳で、後円部の中央に横穴式石室がある。石室内には巨大な横口式の家形石棺が収められており、家形石棺の屋根には直弧文が刻まれている。前方部と後円部のさかい付近の墳丘上に一体の武装石人が立っている。古墳の時期は石室の構造などから5世紀中頃と考えられている。



石人山古墳（航空写真）

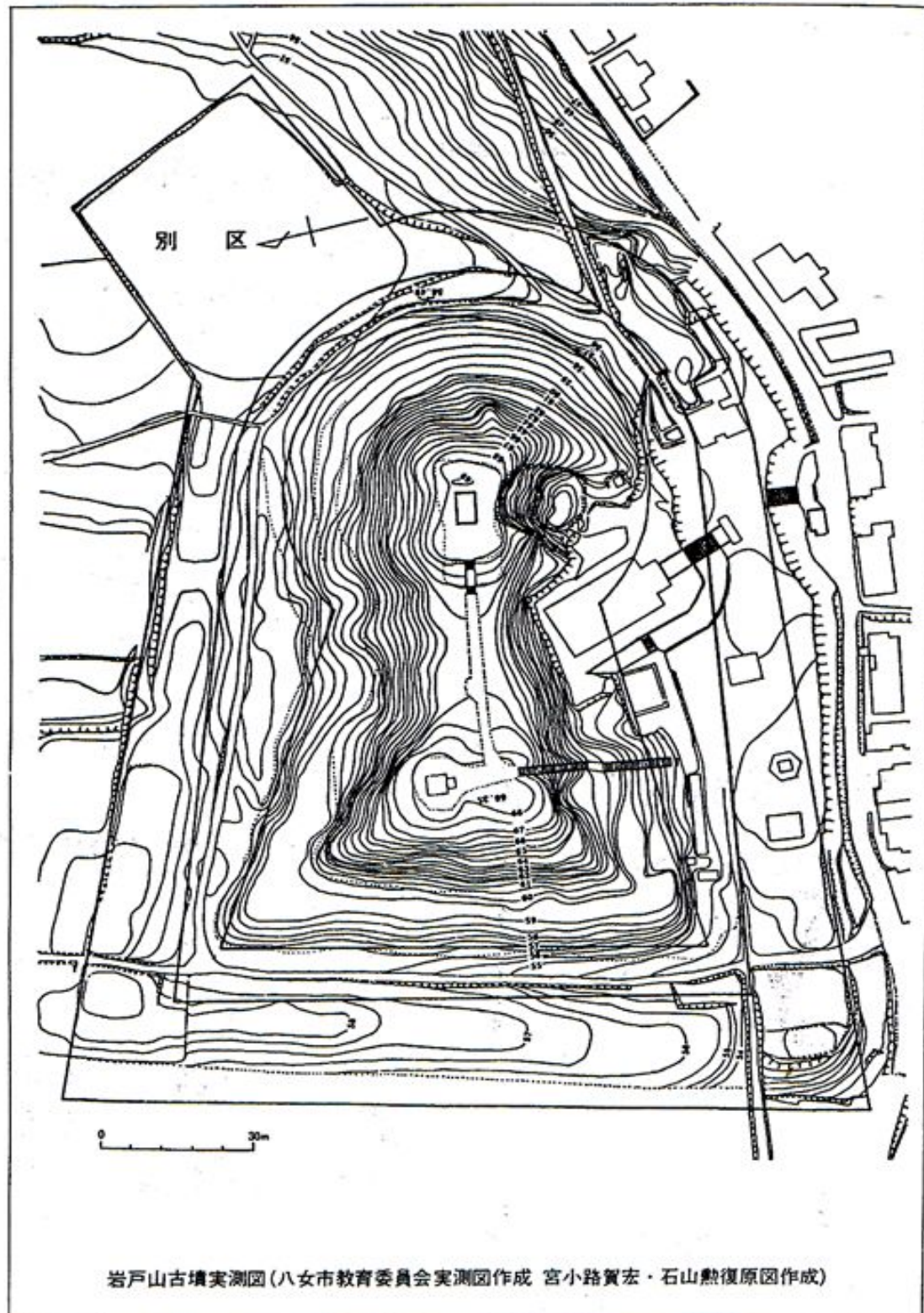


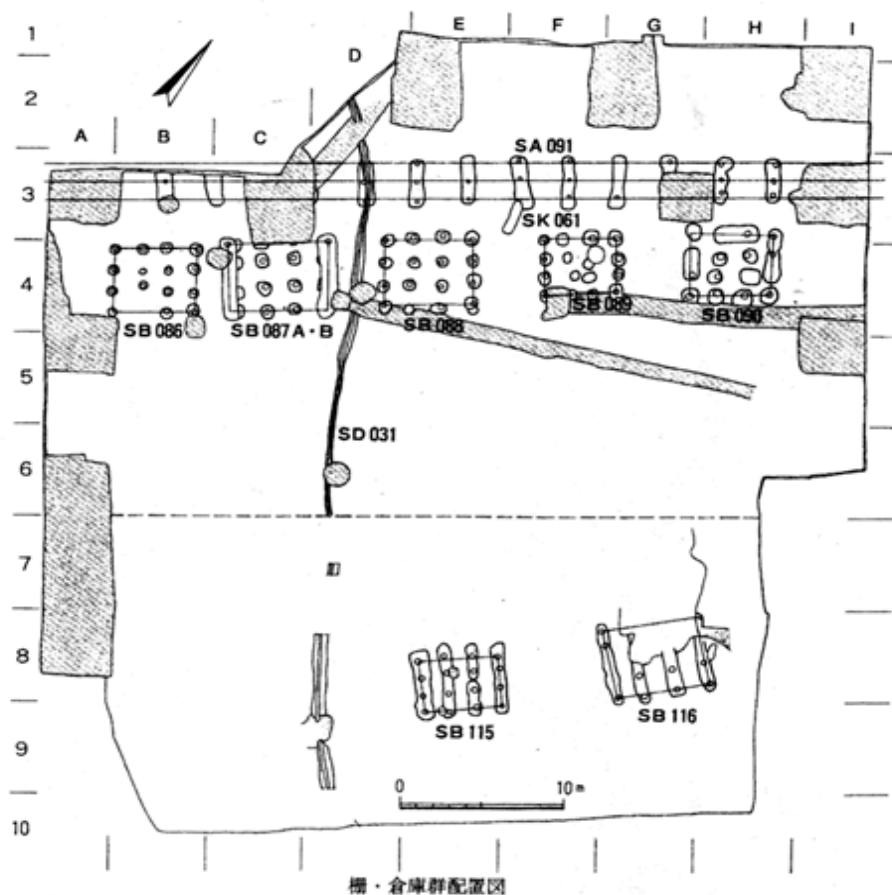
横口式家形石棺



武装石人

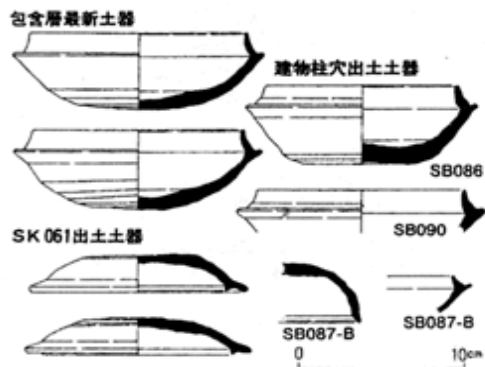
日本列島の馬具の





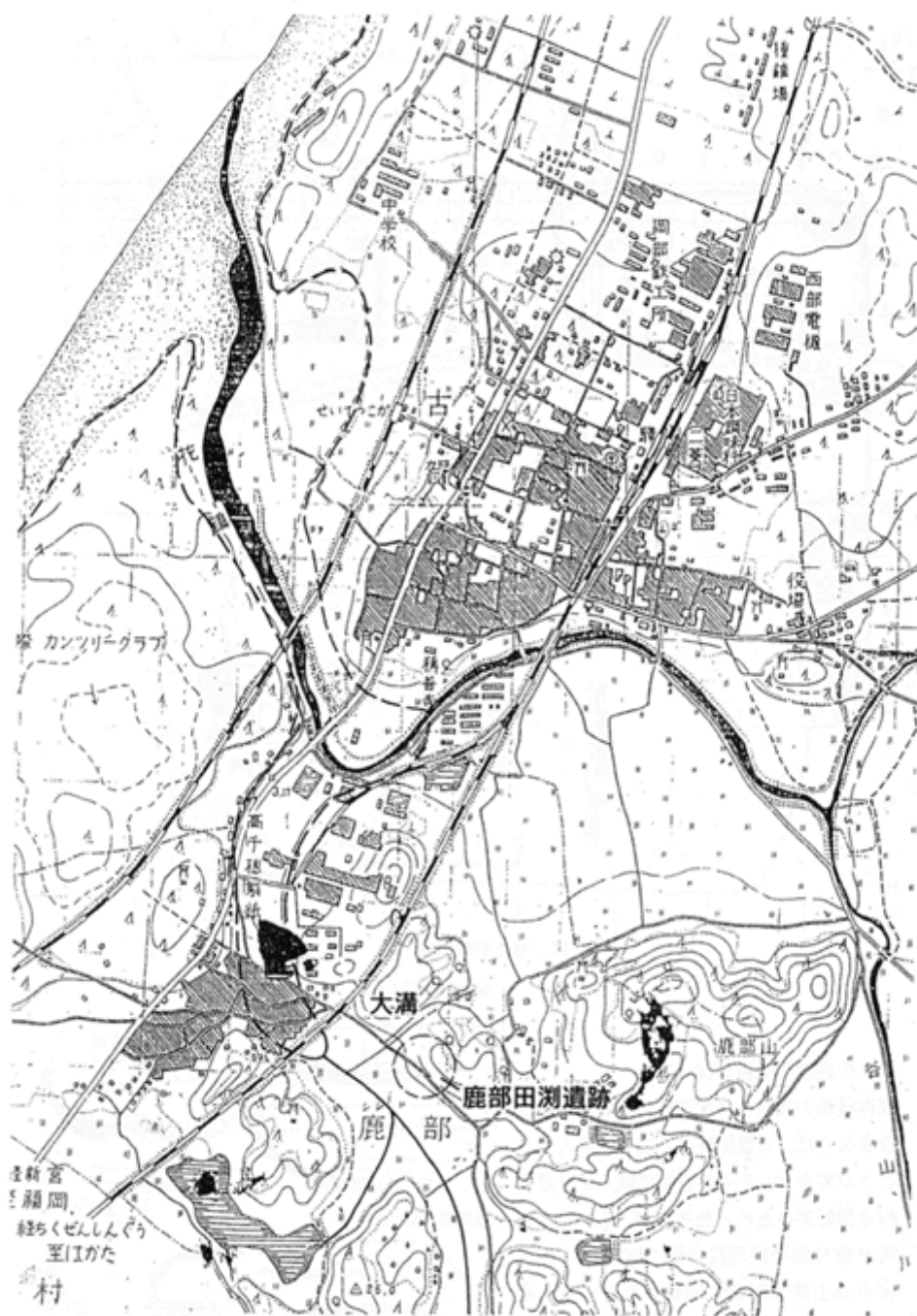
柵・倉庫群配置図

この施設の造営年代は、既存集落の廃絶とほぼ等しい時期を想定しうるのである。6世紀後半の早い段階とすることができる。その終焉期に関しては直接的な情報がみつめられないが、SA091の柱穴が奈良前半期埋没の溝SD031、7世紀後半の土壌SK061に破壊されている。遅くとも7世紀後半に、この施設が廃絶していたといえるにすぎない。



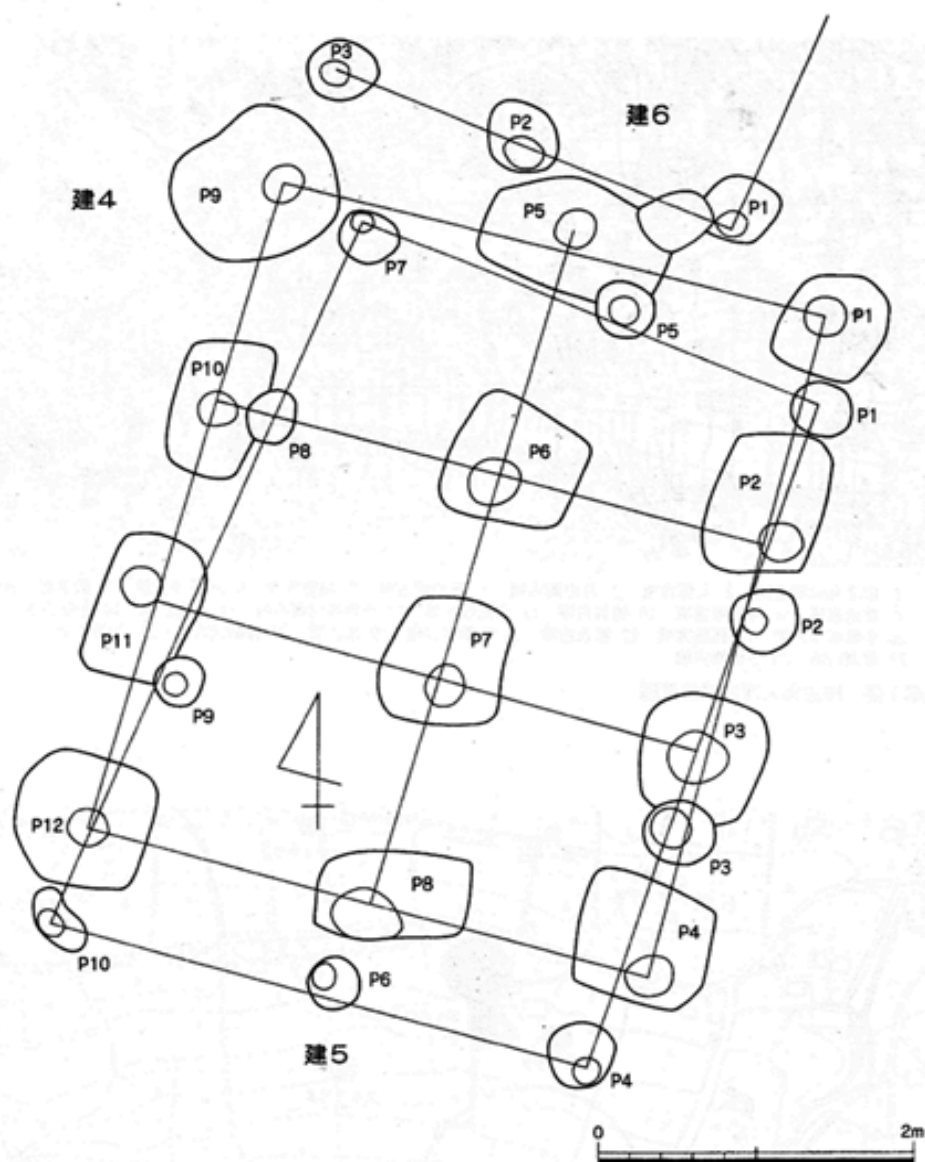
出土土器実測図

福岡市教育委員会，1985『比恵遺跡—第8次調査概要—』
『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第116集



昭和25年古賀町都市計画図と旧地形の補推定ライン (S=1/10,000)

古賀市教育委員会, 2003 『鹿部田測遺跡—第2次・6次・7次調査—』
『古賀市文化財調査報告書』第33集



4・5・6号掘立柱建物跡実測図 (S = 1/40)

建物名	建物	規模 (梁×桁)	梁間 (m)	桁行 (m)	床面積	建物方向	調査
SB1	総柱	2×3	3.6m	4.8m	17.28m ²	南北棟	1次
SB2	側柱	2×6	5.5m	13.2m	72.6m ²	東西棟	1次
SB3	廂付側柱	3(4)×9以上	7m	17m以上	119m ² 以上	南北棟	1次
SB4	総柱	2×3	3.66m	4.5m	16.47m ²	南北棟	6次
SB5	側柱	2×3	3.5m	4.68m	16.38m ²	南北棟	6次
SB6	側柱	2×	2.8m	—	—	南北棟	6次

鹿部田沢遺跡大型建物群掘立柱建物一覧表



- 1 田主丸大塚古墳 2 女塚古墳 3 月の岡古墳 4 日の岡古墳 5 塚堂古墳 6 法正寺古墳 7 星次郎丸古墳
8 重定古墳 9 塚花塚古墳 10 楠名古墳 11 宮地蔵古墳 12 小田茶臼塚古墳 13 神蔵古墳 14 寺部古墳
15 中原狐塚古墳 16 西館古墳 17 富永古墳 18 珍敷塚古墳 19 原古墳 20 鳥船塚古墳 21 古畑古墳
22 前畑古墳 23 下馬場古墳

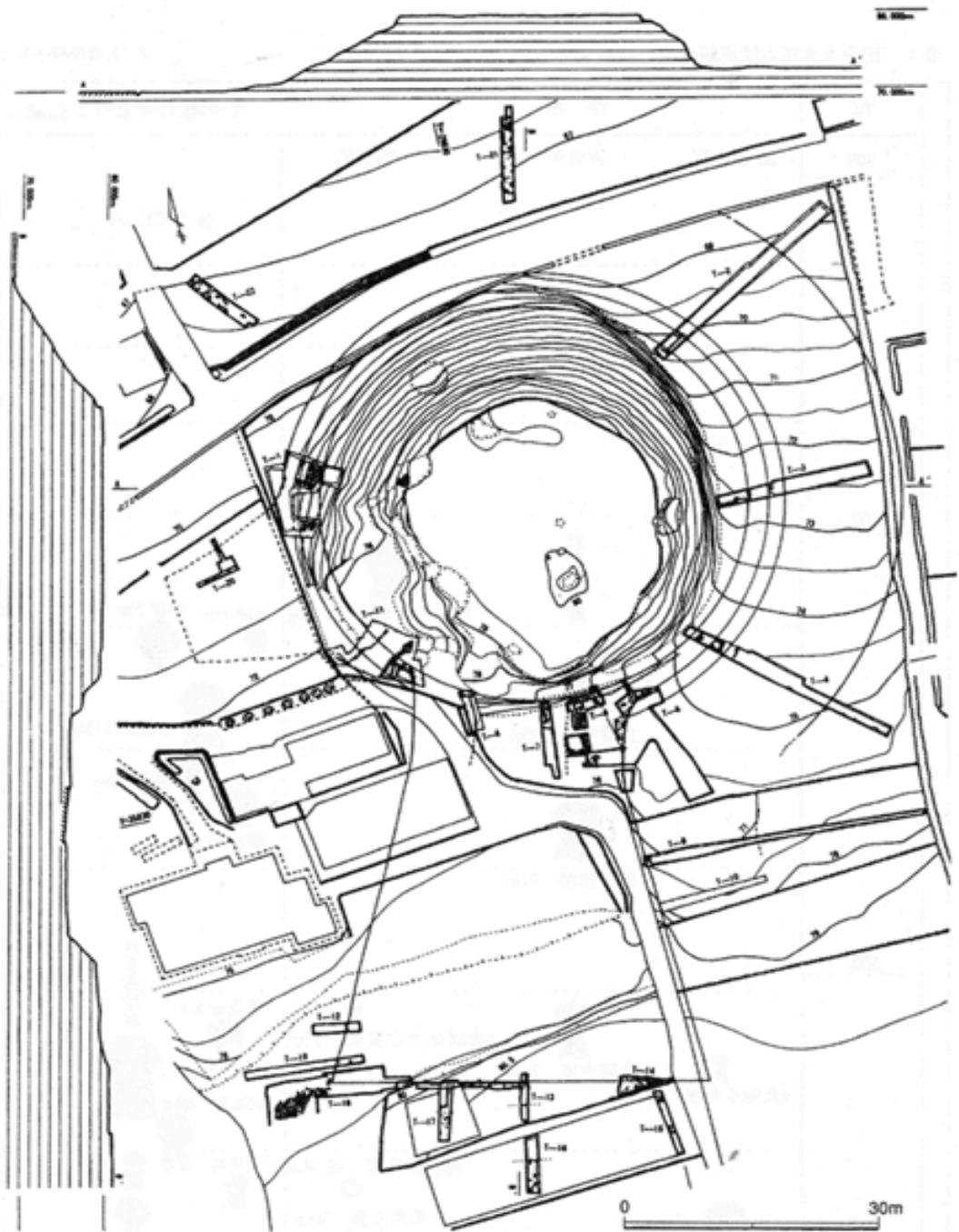
第1図 田主丸大塚古墳位置図



第2図 田主丸大塚古墳周辺図

西谷 正, 2003「筑後・田主丸大塚古墳をめぐる」『新世紀の考古学』
大塚初重先生喜寿記念論文集

朝鮮半島系の



第3図 田主丸大塚古墳墳丘推定図

表1 田主丸大塚古墳周辺地域の首長墓編年表

() は時期未確定

年	浮 羽 郡	その他参考となる古墳
300	田主丸町 吉井町 浮羽町	■ 祇園山 24
	■ 生業1号墳	
	■ 朝田古墳群	
400	若宮古墳群 月岡古墳 95m 塚堂古墳 91m	木塚 45m 甲塚 70m 石人山 120m 石櫃山 115m 浦山 88m 御塚 78m
	法正寺古墳 推定104m	
500	(大塚5号墳 消滅) 日岡古墳 74m (屋次郎丸古墳 推定50m)	権現塚 55m 八女古墳群 岩戸山 138m 弘化谷 39m 善蔵塚 90m
	塚花塚古墳 径30m 重定古墳 70m	二子塚 乗場 60m 鶴見山 85m
600	田主丸大塚古墳 103m 楠名古墳 径32m	岩戸山4号 30m

※「全国古墳編年集成」1996を改変

表2 前方後円墳集成10期該当墳長上位30基(畿内以西)

名 称	旧国名	総 長	墳 長	後円部径	後円部高	前方部幅	前方部長	前方部高	くびれ幅	造出し
見瀬丸山古墳(陵墓参考地)	大和	360	310	150	21	210	188	15	136	無
平田梅山古墳(石山古墳・伝説名天皇陵古墳)	大和	190	140	75	15	110	80	15.7	70	有
田主丸大塚古墳	筑後		103	60	11	45	48		27.5	有
こうもり塚古墳(黒姫塚古墳)	備中		100	60	8	44	60	5		無
大念寺古墳	出雲		91	46	7.3	41.5	47	7.3	19.7	無
善藏塚古墳	筑後		90							無
鶴見山古墳	筑後	110	85	40	5.5	50		4		無
須多田下ノ口古墳	筑前		82	44	5.6	53	44			無
天鼓ノ森古墳	山城		80							無
天降神社古墳	筑前		80	43	1	56	38	3.5	24	無
伊勢塚古墳	肥前		78.4	36	7	28	45	5		無
重定古墳	筑後		70	40	8		25	5		無
寺山古墳	筑前		68	41	39	58	35	38	32	無
二子塚古墳	備後		68	36	5.5	30	30	4.5	22	無
鳥取上高塚古墳	備前		67	30	5	40				無
桂川天神山古墳	筑前	85.5	66.8	40	7	44	30.4	6	26	無
片平大塚古墳(伝説名天皇陵古墳・重定山古墳)	山城		65							無
相原古墳	筑前		62	30	9	23		2		無
東瀬寺古墳	出雲		62	33	3.5					無
鳥土塚古墳	大和		60.5	35.3	6	31	28	6.5	24	無
二塚古墳(鏡取塚古墳・新庄二塚古墳)	大和	89	60	36	13	41	33	13	33	有
衆場古墳	筑後		60	30	5	35		5		無
天満2号墳(天神山2号墳)	豊後		60	31	5	27	29	4	15	無
平林古墳	大和		55	25	4.9	35	33	5.1	15	無
二塚山古墳(双塚古墳)	備前		55	34	6	34		4		無
岩屋古墳(淀江向山1号墳)	泊善		54	34	6	22		4		無
中將塚古墳	摂津		50							無
妙蓮寺山古墳	出雲		50	25	3.8	22	25.6	1	10	無
平神社古墳	隠岐		48	28	5.5	24	22	3.4	16	無
国分大塚古墳	近江		45	32	1.8	27	16	1.8	19	無

※巻紙の双六古墳は前方後円墳集成中では9期該当とされるので表中には未掲載であるが、10期であれば田主丸大塚古墳・こうもり塚古墳に続く規模となる。

	日 本	朝 鮮 半 島	中 国	
520	513 このころ百済、日本に五経博士 士を送る。 527 筑紫国造磐井、大・豊2国に拠 りて反乱をおこす。 528 筑紫国造磐井、筑紫国卿井に戦 い新られる。筑紫若葛子、糟屋 屯倉を獻じて死罪を免れんとす る。 529 近江巨毛野、新羅・百済の任那 進出阻止に失敗。	521 百済、新羅、(南朝) 梁に遣使。 525 百済、武寧王陵築造。		梁
530	531 欽明天皇が即位するという。 この頃、屯倉の集中的設置を伝 える。 536 那の津(博多)に官家を修造する。 537 大伴連狭手彦、任那にわたり、 百済を救う。 538 百済の聖明王、仏像、経論を倭 国に送る。	532 駕洛国(金官伽倻)新羅により 滅亡。 538 百済、泗沘(扶余)に遷都。	535 北魏が、東魏と西魏に 分裂する。	北魏
540	540 大伴連金村、任那4県割譲問題 で引退する。	545 このころ、高句麗が大いに乱れる。 546 高句麗、西魏に入貢する。 548 高句麗、百済の独山城を攻める。		高句麗
550	547 百済、倭国に救援を求める。	550 百済と高句麗、長年の戦争によ り、ともに疲弊する。 551 新羅、百済ともに連合して、高 句麗を討つ。	550 東魏滅びて、北齊成立	北齊

